

『不安が高い R 君が安心して通園できるようになるまで』

児童発達支援センターうべつくし園

児童指導員 浅野 千紘

1. はじめに

うべつくし園では、主に児童発達支援事業、保育所等訪問支援事業、その他受託事業などを行っています。

児童発達支援事業では、月曜日～土曜日を通園日とし、毎週月曜日は親子通園日を設定しています。新しく入園されたお子様については、継続して親子通園をして頂くことで、お子様が安心して通園できるようにし、また保護者の方には職員と情報共有をしたり、保護者同士のつながりを深めたりすることで、子育ての悩みやヒントを一緒にシェアできる機会を設けるようにしています。

今回は、うべつくし園に入園したお子様が安心して通園ができるようになるまでの事例を元に、お子様の成長の様子と心の変化を紹介します。

2. R君のプロフィール

◆氏 名：R 君

◆性 別：男

◆年 齢：3 歳（H31.4 月入園現在）

◆診断名：自閉症スペクトラム、知的障害、ADHD

◆家 族：両親

◆好きな物：トーマス、ドラえもん、電車、車などの玩具

◆好きな遊び：プラレール、砂場でのおままごと、三輪車やコンビカーに乗ること

◆苦手な遊び：糊、スライム、絵の具、粘土、手形スタンプなど、手が汚れる遊び
（道具を介すと活動可能な時もある）

◆性 格：優しい、繊細な心、慣れた大人にはいたずらをするなど、子供らしい一面がある。

◆彼の特性：多動、注意散漫、過敏が強い（触覚、聴覚、聴覚）、身体の使い方が不器用、学習能力が高い、切り替えが苦手。

◆コミュニケーション：大人と目を合わせることは可能。「おいで」「やって」など、日常の簡単な声掛けは理解可能。本児から発せられる言葉は、主に「ママ」「ない（No）」だけだった。

◆一番気になる所：超がつく程の「不安」が高い

◆入園前まで：地域の幼稚園に所属。集団活動の不安や緊張が徐々に鮮明に表れ、登園を拒否するようになる。同時期から、うべつくし園の外来療育教室（1 回／週）に親子で通い始める。幼稚園での経験が記憶に残っていた為か、外来療育教室でも不安な様子で入室できなかったり、活動への参加が難しかったりする時があった。

3. 入園当初の様子

初登園日から2～3日は両親と車で登園し、父親におんぶされながら不安そうな顔で登園してきた。在籍クラスの前に到着すると、入室できず廊下で泣いてしまった。本児が好きなトーマスの玩具を見せながらクラス内に誘うが入れず、そのまま廊下でトーマスの玩具で遊ぶ。1時間ほど経過し、他児が園庭に遊びに行く様子を見て両親が園庭に誘った。活動への切り替えや気持ちの切り替えが苦手な本児は、泣きながら両親に連れられて園庭に行く。園庭では他児が遊んでいる様子を見たり、好きな三輪車などを見つけたりすると、徐々に泣き止み遊び始める。しかし、その後は2時間以上園庭遊びを続け、職員が入室に誘うが応じることが難しかった。不安が高い為か、給食も一切食べようとはしなかった。翌日からも、同じような過ごし方をし、好きな遊びや園庭遊び（自由遊び）などを始めると、次のスケジュールへの移行はとて難しく、降園時間までそのまま同じ遊びをしていたり、同じ場所から動かなかったりする日も多くあった。

不安がとて高く、見通しも持ちにくい、一度経験したことをよく覚えていることから、無理な活動への誘いは控えるようにした。毎日登園することは可能だったが、何日も変わらない状況に、職員は対策に大きな悩みや迷いを抱えていた。

4. 支援計画と取り組み

本児には、とにかく「安心して登園し、安心して過ごしてもらおう」ようにした。支援計画は、「好きな遊びをして、情緒を安定させること」「先の見通しを持って生活すること」を挙げた。その為に具体的な取り組みとして、以下の内容を行った。

- ① 登園後すぐに好きな遊びができるように、玄関前の個室に好きな玩具を沢山準備した。
- ② 好きな遊びや、一度始めた遊びは満足するまで遊べるようにした。
- ③ 一つの遊びには最低1時間半ぐらいは必要だと見込み、それぐらいのタイミングで行われる活動を予め知らせておく。「R君、次は〇〇（活動名）があるよ」などの声掛けを行った。また、その日の本児の機嫌や様子を観察し、母親と職員で常に先を予測し、先手を考えるようにした。
- ④ 本児からでた要求は全て保証するつもりで、徹底的に寄り添いの姿勢を示し、絶対に無理をさせない。本児にとっては、「この人（先生）何でも聞いてくれる」と思われるようにした。対応する職員も、可能な限り担任一人に絞った。

5. 取り組みの成果

上記の取り組みを始めて数週間、これと言って大きな成果を感じられることは少なかった。当園直後から好きな遊びを始めると、1時間半どころではなく、2時間以上経っても終われず、ただ時間だけが過ぎる一方だった。また、一度経験したことを覚えている為、本児が好きな玩具を、偶然にも他児が使っていたことで遊びが保証されなかったと感じ、大泣きをすることもあった。当園にまだ安心しきれていない本児は、一度泣き始めると気持ちを切り替えることが難しく、そのまま大パニックの状態になることも多かった。一度パニックが起きると、好きな玩具を渡したり、過ごす部屋を変えたりすることで場面を変えても落ち着くことはできなかった。危険を回避しながら見守り続け、1時間経過し泣き疲れて徐々に落ち着くという流れで、状況が変わるのを

待つしかなかった。

職員間で検討した取り組みにも成果が見られなかったり、毎日不安そうな顔をして過ごす R 君を見たりしていると、支援者として、今後の支援に自信を喪失したり、不安になったりすることもあった。これまで幾度となく、色んなお子様と関わってきたつもりだったが、この時は初めて「何をやってもダメだ…」を感じてしまうこともあった。

6. 支援の更なる展開

支援への成果が見られなかった状況も落ち込んだ。しかし、それ以上に、何時間も同じ遊びを続けることや、大パニックになって手がつけられない状況の本児を、他人の子を見ているように、本児を見つめる疲れ切った母親を見ることの方が、よほどショックを受けた。

そこで、本児への取り組みの他に、母親への支援も同時に検討し、以下のように取り組むことにした。

① 毎日本児の様子を職員と一緒に観察する。

→小さな行動でも、本児にとってはどんな意味があるのかを一緒に考える。

② たわいもない楽しい会話をする。

→母親の話聞くだけでなく、子育てに関係ない話題でストレス発散を狙う。

本児だけでなく、母親への寄り添いも丁寧過ぎる程、意識して心がけるようにした。

毎日の取り組みは、本児に対して「好きな遊びを保証」すること、母親に対して「とにかく寄り添う」ことを意識した。そして、園生活中の活動の区切りでは必ず「みんなと今から〇〇するよ」「次は〇〇の部屋に行くよ」など、次の予定を知らせた。好きな遊びをしている本児は、職員の誘いに応じることはなかったが、クラスメイトが何をしているのか、今は何の時間なのか、などの生活の流れを知らせるように声掛けを続けた。

7. R君の変化

取り組みに成果が見られ始めたのは、入園して2か月半～3ヶ月後のことだった。全ての活動に応じることは難しいが、登園後は、自分のロッカーに鞆を片付けたり、クラスメイトが園庭遊びに行く時には同じタイミングで本児も一緒に園庭に移動したりするなど、園生活でのおおまかな流れに添えるようになってきた。

(※図1… R君の生活の流れの変化)

(※図1)

R君の生活の変化				
	園生活 (クラスの流れ)	4月	5月～6月	7月
10:00	登園	登園	登園	登園
10:20	朝の あつまり	自由遊び	自由遊び	自由遊び
10:30	療育活動	自由遊び	自由遊び	療育活動
11:00	外遊び	自由遊び	外遊び	外遊び
11:45	給食	外遊び	外遊び	外遊び
12:30	自由遊び	外遊び	外遊び	外遊び まれに給食
13:15	昼の あつまり	外遊び	外遊び	外遊び
13:30	療育活動	自由遊び	自由遊び	自由遊び
14:15	帰りの あつまり	自由遊び	自由遊び	自由遊び
14:30	降園 (バス)	降園 (バス)	降園 (バス)	降園 (バス)

7月下旬頃には、園生活の一日の流れは理解でき始め、調子が良い時は、クラスメイトと一緒に療育活動に参加できるようになってきた。この頃は、以下のような変化が見られた。

- ① 1～2段階の活動の見通しが持てるようになってきた。写真カードで提示すると理解可能。
- ② 母親と一緒にあれば、あつまりに参加できるようになった。
- ③ その日の療育活動が好きな内容であれば、クラスの流れに添って過ごせる日が増えてきた。
- ④ 活動の区切りが理解できるようになってきたため、帰り支度がスムーズになり、「また明日ね」が何となく理解できるようになってきた。
→翌日の登園を楽しみにするようになってきた。

この頃には、母親から離れて一人で遊んだり、遊び慣れた職員と一緒に過ごしたりする時間が増えてきたため、単独通園のタイミングを検討し、親子通園から単独通園に切り替える準備を始めた。

8. 単独通園

7月中旬から始まった夏季療育（プール療育）で、母親から離れてプール内に入ったり、他児と玩具を共有して楽しそうに遊んだりする様子が徐々に見られるようになった。本格的な単独通園に向けては、以下の取り組みを行った。

- ① 単独通園の約1週間前から、単独通園の意味を伝えながら予告した。
- ② 園生活の流れやその日の療育活動がわかるように、本児専用のスケジュールを設置した。本児の見通しに合わせて、2～3段階の予定から徐々に一日の予定を提示するようにした。（※図2）スケジュールには本児の好きな遊びを中心にしながら、添えない活動の時は無理をせず、次の予定に移行した。
- ④ 本児の導線をできるだけ短くするため、スケジュールは本児のロッカーの真横に設置した。

☆不安が高い本児には大人と一緒に行動するようにして、職員が常に傍にすることで、安心できるようにした。

単独通園初日は、送迎バスに乗車する時は母親との分離で泣いてしまったが、添乗員を担任にしたことでバスが園に到着する時には泣き止み、周りの様子を見て、状況を確認している様だった。園に到着してからは、いつもの園生活の流れや好きな玩具で、個室で遊べると理解でき、落ちつきを取り戻した。療育活動では、好きな水遊びだった為、不安に感じていたことを一時的に忘れることができ、他児と楽しそうに遊ぶ様子が見られた。

単独通園は3～4日ですぐに慣れ、送迎バスに乗る時は窓越しに母親に手を振る姿も見られた。しかし、園生活にまだ多少の不安と緊張感がある為か、本児に関係のない話でも、職員同士が打ち合わせをしている内容を自分のことだと勘違いして酷く嫌がることがあった。そこで、新たに2つの取り組みを行った。

◆本児が職員の話をしている時は、本児に誤解されないように、予め決めていた暗号を用いたり、本児が知らない単語に置きかえて打ち合わせしたりするようにした。

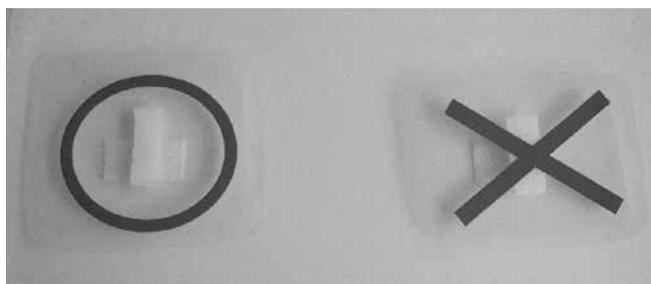
◆職員からの誘いなどに、返答しやすいように○×カードを用いて、応えやすいようにした。（※図3）

(※図2)



スケジュールはロッカーの真横に設置。

(※図3)



「Yes / No」の返答は、○×マークを指さして。

9. 継続的な取り組みの成果

登園後、自分のロッカーの真横に自分のスケジュールがあることで、その日の予定を自分で確認することができ、見通しを持って生活できるようになった。初めて見る写真カードや、活動の順番がいつもと少し違う予定の時は、本児からの指さしや、「何で？」と言うような表情で職員にサインを出せたことで、イレギュラーな予定でも説明すると納得できることが増えた。苦手な活動や行きたくない場所のカードがあった時は、ロッカーに常備してある「○×カード」で×を指差し、やりたくない活動を伝えることができた。本児から「×(NO)」サインが出た時は、その場ですぐに予定を変更すると、不安なく過ごすことができていたようだった。

親子通園時からの、「無理のない取り組み」と、単独通園になってからの「安心できる要素を作った取り組み」は、その都度多少の改善を踏まえながらも、半年以上継続して行った。その結果、毎日の園生活のベースは変えず、その日の本児の思いに添った過ごし方をしたことで、情緒の安定に繋がり、安心して園生活を送れるようになった。

更に「○×カード」の成果は、カードが手元にない場面でも、本児からジェスチャーを交えた自発的な「はい／いいえ」が見られるようになった。「はい／いいえ」の2つのサインだけでも、他者とスムーズなコミュニケーションがとれるようになったことで自信がついたのか、身近な職員だけでなく、他クラスの職員や他児に対しても自信を持って自分からサインを出す様子が見られるようになった。

コミュニケーションに自信がついたことで、療育活動に限らず、自由時間においても、自分から他児のおいかけっこの輪に入ったり、乗り物を介して押し合いっこをしたりするなど、自発的に他児と遊ぶようになっていった。また、他児と関わり合うようになってからは、泣いている児、困っている児、ケンカをしている児など、周りの状況により一層気づきやすくなった。そして、その都度、大人の手を引いて、その現場に連れて行くなど、友だちを思いやったり助けようとしていたりするなど、他者への気持ちの変化にも気づけるようになった。



単独通園を始めてから、約2週間後のR君の様子。不安な表情から一遍、嬉しそうに水遊びをする笑顔のR君が見られるようになっていった。カメラを向けても、嫌がらずに彼なりの「楽しい顔」を表現することができるようになった。

10. その後のR君

このような取り組みは、その後も継続し、一年たった頃には以下のような大きな成長が見られた。

☆生活の見通しが持てるようになってから、時系列で「昨日」「今日」「明日」の理解ができるようになった。

☆活動への切り替えがとてもスムーズになり、給食もクラスメイトと食べるようになった。

☆他児と遊びを共有できるようになったことで、遊びの幅が増えた。遊びが広がると、やりたい遊びを自分から職員にリクエストできるようになった。

☆他児と遊びの中で、「交代」「貸し借り」などの、やり取りが徐々に理解できるようになった。

☆日曜日などの休園日でも、「行きたい」と登園を望むようになった。

そして、安心して登園できるようになり、様々なことに見通し（予測）が持てるようになったことで、苦手な活動や初めての活動でも「少し頑張ってみよう」とする気持ちが持てるようになったことは、この一年で何よりも大きな成長だと感じ取れたことだった。

11. おわりに

支援者として経験が増すと、ある問題に直面した時には似たようなケースを参考にしたりすることは沢山ある。しかし、どのような状況でも”十人十色”という言葉は本当に大切にしていってほしいと、今回の事例で改めて感じさせられるものだった。”一人一人に本当に合った支援”とは何か、常に初心を忘れず、今後も沢山の子ども様達と関わりたいと思った。R君親子には、心から感謝したい。